

原発立地反対・第十堰問題…

社会運動の歴史 後世に

社団法人徳島県労働福祉会館は、県内で起きた労働や平和、人権をめぐる社会運動の資料を収集・公開する「とくしま社会運動資料センター」(仮称)を2014年度に設立する。運動の中心となった団塊の世代が高齢化する中、資料の散逸を防ぐとともに、社会的に重要な役割を果たした運動の軌跡をたどることで、将来の市民運動や労働福祉の向上に役立ててもらう。

(2面に「人」)

県労働福祉会館

センター設立は、会館が4月に一般社団法人へ移行することに伴って取り組む公益事業の一環。運営するヒュ

ムンわーくびあ徳島や春闘など組合活動を(徳島市昭和町3)の中心に、阿南市の原発2階に事務所と資料室、立地反対運動(同)、を設ける。広く社会連、公共事業の是非を問う動の歴史を紹介する施、全国初の住民投票が2設は移し、会館は個000年に行われた吉人や団体からの資料、野川第十堰可動堰化計画提供を呼び掛けている。画をめぐる住民運動な

14年度 資料保存へ拠点設立

センター設立に向け資料を整理する久積さん
徳島市昭和町3



どの資料。書籍や機関。他の施設と連携し紙のほか、新聞やビデオ調査研究も視野に入なども募る。

資料はデータベース。設立を提案したの化して無料で閲覧・検は、労働や平和運動に案でできるようにし、企長年関わってきた会館画展や専門家を招いた副理事長の久積育郎さセミナー、研究会を開ん(66)。社会運動は一

定の役割を果たすと組織が解散し、資料が残らないことを以前から気に掛けていた。

一緒に活動していた知人から「残していたも使わないので資料を捨てた」という話を聞き、保存場所の必要性を痛感。13年8月から

会館の法人移行準備室のメンバー4人でセンター設立に向けて話し合ってきた。

既に数人から書籍や写真の提供を受けた。1月下旬からは労組や市民団体、NPOなど約70団体にアンケート調査を行い、資料提供や運営面での協力を求める。

久積さんは「徳島の社会運動の歴史を次世代につなぐために、多くの力を結集した協働事業にしたい」と話している。

問い合わせは会館事務局(電話088(602)0532)。

(新居和人)

県内社会運動の資料を収集

センター 来月開設

労働や平和、人権をめぐる徳島県内で起きた社会運動に関する資料を収集・公開するため、一般社団法人県労働福祉会館が準備していた「とくしま社会運動資料センター」が10月1日、ヒューマンわくびあ徳島(徳島市昭和町3)の2階に開設される。企画展や公開講座も計画しており、会館は関連資料の提供を呼び掛けるとともに運営ボランティアを募っている。

センターの開設は、ら労働運動や人権活動社会運動の軌跡を将来の新聞、書籍、ビデオの市民活動や勤労者福など数百年が寄せられ祉の向上に役立てるのたほか、労組、市民グが狙い。提案した会館ループなど11団体が会副理事長の久積育郎さ報や機関紙の提供を決ん(67)をはじめ、鳴門めている。記念企画展市賀川豊彦記念館と連として10月1〜12日、合徳島などの関係者11社会運動家・賀川豊彦人が運営委員となり、の活動の足跡をたどる5月に設立準備会を発パネル展を開く。期間中、記念館の田辺健二館長による公開講座も

企画展や公開講座計画

予定している。
2014年度は他に
企画展と公開講座を各
1回開く。テーマとし
て▽1970年代に阿
南市であった原発立地
運動などが候補に挙
がっている。



運営ボランティア募る

反対運動▽85年に再審無罪判決が出た徳島ラジオ商殺し事件の支援運動▽公共工事の是非を問う全国初の住民投票が2000年に行われた吉野川第十堰可動堰化計画をめぐる住民運動などが候補に挙がっている。

開設までに資料の管理や企画展の準備に携わるボランティア20人を確保したい考え。久積さんは「資料を後世に残すために協力してほしい」と呼び掛けている。問い合わせは会館事務局(電088(602)0532)。(新居和人)

10月のセンター開設に向けて話し合う運営委員▽徳島市昭和町3

「け、当面避難所で過」人や知人を中心に作業」

速、たりるビでは高正

たけにいり

社会運動資料1万点

徳島市で
センター開所



開所式の後、センターを見学する関係者—徳島市昭和町3のヒューマンワークびあ徳島

徳島県内で起きた労働や平和、人権など社会運動の資料を収集・公開する「とくしま社会運動資料センター」の開所式が1日、徳島市昭和町3のヒューマンワークびあ徳島で行われた。

センターは、同所2階の一室(40平方メートル)に設けられ、労働運動や平和活動の書籍、新聞、ビデオなど1万点以上を所蔵。資料目録はデータベース化され、センター内のパソコンで

検索できる。開所時間は日、月曜と祝日、お盆、年末年始を除く午前10時～午後3時。

開所式には県や労働組合、平和団体などから約50人が出席。久積育郎センター長が「社会運動の記録を次の世代につないでいきたい」とあいさつし、テープカットをした。

この日は公開講座があり、鳴門市賀川豊彦記念館の田辺健二館長が講演。5階ホールでは、賀川豊彦の活動の足跡を紹介するパネル展が12日まで開かれている。(新居和人)

県内女性活動家 輝く足跡紹介

徳島県内で起きた社会運動の資料を収集・公開している「とくしま社会運動資料センター」(徳島市昭和町3)は、さまざまな分野で活躍した県人女性を紹介する本を出版する。女性の地位向上に尽力した人の足跡に光を当て、今後の女性運動などに役立ててもらう。28日を皮切りに公開講座を3回開き、内容をまとめる。

とくしま社会運動資料センター

タイトルは「輝いた阿年」、男女共同参画交流波の女性たち。明治以センター・フレアとくしま降の政治家や文化人、教まの開所(2006年)育者らを活動内容とともに、県内外の女性運動に掲載する。女性参政権の歴史や出来事も盛り込の獲得(1945年)やむ。

県女性協議会の発足(81)掲載人数は未定だが、

政治家・文化人ら集めた本出版へ



センターの委員やスタッフと打ち合わせをする乾さん(左端)＝徳島市昭和町3のわーくびあ徳島

女性で初の国会議員とな員や市民活動家らも紹介した紅露みつ、県内の女する。性新聞記者の草分けとして知られる坂口あさ、徳ンターは、社会運動につ島文理大を創立した村崎いて学ぶ講座を事業の柱サイラを取り上げる予に据えている。12月の運定。現在活動している議営委員会「県内では多

くの女性が活躍してきたが、あまり知られていない」との意見が出たため、女性運動に詳しい元参院議員の乾晴美さん(80)に講師を打診。講座内容を詰める中で出版の構想が持ち上がった。

1回目の講座は28日午前10時から徳島市昭和町3のヒューマンわーくびあ徳島で開き、乾さんが女性運動の歴史を解説する。参加無料。本の執筆は乾さんとセンターのスタッフ2人が講座と並行して行い、出版は16年3月になる見通し。

乾さんは「女性だけでなく、誰もが平等な社会はどうあるべきかを考えるきっかけとなる本にし」と話している。(新居和人)

徳島で起きた社会運動について学べる公開講座
徳島市昭和町3の県労働福祉会館別館



徳島の社会運動“発掘”

とくしま社会運動資料センター(徳島市)が、徳島県内で起きた社会運動について学ぶ定期公開講座の題材を募っている。徳島になじみのある社会運動を掘り起こし、眠っている資料や証言を教材に取り上げることで、一層の関心を持ってもらうのが狙い。

公開講座は2014年10月のセンター開設以来、計6回開かれ、毎回50〜80人が参加した。森永ヒ素ミルク中毒事件や社会運動家・賀川豊彦(1888〜1960年)などが題材となり、その歴史的背景や社会運動の役割を学んだ。

センターは講座の充

資料センター

実や継続性を重視しており、貴重な証言や資料の収集にもつながるため、県民から広く題材を募ることにした。

県内では、吉野川第十堰の可動堰化や那賀川の細川内ダム建設計画を巡る住民運動など、全国の耳目を集めた話題がある。70年代

公開講座の題材募集

後半には阿南市内で原子力発電所の立地計画が持ち上がり、地域を巻き込んだ大きな反対運動が起こった。

久積育郎センター長(68)は「まちづくりに発展したケースもあり、社会運動には先人の知恵が詰まっている。今の世に生かせるヒントが学べるはず」と話している。

題材の募集は20日まで。問い合わせはセンター(電088(602)0532)。

(矢田諭史)

政治、文化などの各分野で活躍した阿波女を紹介する本「輝いた阿波の女性たち 女性の地位向上を目指して」(A5判、197頁、写真)が出来上がった。と

社会運動資料センター

くしま社会運動資料センター(徳島市昭和町3)が昨年開いた同名の公開講座の内容を編集。先駆的な女性たちの活躍ぶりをまとめた。

阿波女の活躍紹介

「女性の地位向上を目指して」本完成



センターが昨年2、3月に3回開いた公開講座で講師を務めた元参院議員乾晴美さん(82)「同市上吉野町3」らの話を基に加筆、修正した。かつて活躍した女性を取り上げた本では、(1891~1983年)ら5人の人物像に

紅露みつさんら15人

公開講座 権利啓発など訴え
内容を編集

迫った。現在も活躍する女性を取り上げた本では、講座にゲストとして登壇したストップDV・サポートの会代表の東條恭子さん、反核・憲法フォーラム徳島代表委員の高岡千代子さんら10人が、自身の活動を紹介。配偶者暴力のない社会の実現や男女平等教育の大切さなどを訴えている。

久積育郎センター長は「徳島の女性たちの素晴らしい活躍を知ってもらうことで、女性の地位向上につながれば」と話している。

千部作製、1冊千円。県立図書館などに寄贈する予定。センターでも閲覧できる。問い合わせはセンター(電0888(602)0532)。(木村恭明)

人権・労働・平和活動…

社会運動視点で

部落史編さん

とくしま社会運動資料センター(徳島市昭和町3)が、社会運動の視点から県内の部落差別問題の歴史をまとめる作業を進めている。差別撤廃を訴える部落解放運動や人権活動と労働、平和運動との関わりを、関係者の証言や資料を元に調査している。2019年度に部落史として編さんする予定で、センターは県民に資料提供を呼び掛けている。

とくしま資料センター

センターには14年10体の部落史はなく、部落の開所以降、県民が部落解放運動や人権活動から社会運動に関する書に関わった人も高齢に籍や新聞など約3万点なっていることから、部落史が寄贈され、うち部落17年10月に久積育郎セナター長や四国大の関組んだきつかけや体験談を聴取。水平社博物館

学)ら5人で検討会議を立ち上げ、資料の整理を始めた。

全国水平社の県内組織設立(1924年)

や狭山事件(63年)への抗議集会、明治大

正時代に県内各地で頻発した小作争議など、

戦前・戦後の出来事を中心にまとめる。明治

時代以前は、できるだけ古い年代までさかのぼって年表化する。

これまで6人から部落解放運動などに取り

組んだきつかけや体験談を聴取。水平社博物館

関連資料 提供呼び掛け



部落史編さんに向け議論する検討会議のメンバー＝徳島市昭和町3のとくしま社会運動資料センター

館(奈良県御所市)やが少しずつ分かってき大阪府立図書館など県外にも足を伸ばして資料を探している。2018度末から5回の公開講座を開き、その内容を本にまとめる。問い合わせはセンター事務局(電0886020532)。(新居和人)

重伝中意哉夫ハ人事事故

宇浦

車の運転中に眠くなる。ことがあったと供述

府警交通捜査課によ

セクハラ加害

橋市 明ら 職員の 日、ハ した 女性 都彦 東

る傾 浅い 4% った 知人の レビ クタ、 を報

とくしま社会運動資料センター・公開講座の記事が、朝日新聞にて掲載されました。

13版▲2018年(平成30年)9月9日(日)東京

バス連携・値上げ盛る

四国鉄道懇 次回、中間報告まとめ

「四国における鉄道ネットワークのあり方に関する懇談会」の第3回会合が高松市で開かれた。鉄道網を維持するため、バスとの連携や運賃の値上げなどを盛り込んだ中間報告案が示されたが、香川県の浜田恵造知事ら自治体側から「国はもともとJRの経営を支援すべきだ」などと修正を求める意見も出て、とりまとめは次回に持ち越された。

5日の懇談会には座長の正司健一・神戸大学大学院教授をはじめ、JR四国幹部や四国4県の知事らが出席。同社の半井真司社長は冒頭、7月の西日本豪雨の被害に言及。「防災対策が一層必要で負担がのしかかっている」と述べ、鉄道ネットワーク維持が難しいとの考えを改めて強調した。

提出された中間報告案では、四国の鉄道の利用客がピーク時の半分以上に減っていることや、全路線のうち75%が開通から80年以上

経ち設備の更新に多額の費用がかかるといった現状を紹介。鉄道路線維持には、鉄道を利用しやすい環境作りや財源確保の仕組み作りを取り組むよう求めた。

具体的には、鉄道より低コストで運営できるバスな

どと連携し地域の特性に合う交通網を再編することや運賃の値上げ、駅舎や線路を自治体などが管理して鉄道会社が運行するという上下分離方式の導入検討を提言した。大都市圏がなく人口減少が進む四国での鉄道事業継続のため、国や自治体にも取り組むべきことを整理するよう要望した。

中間報告案について、浜田知事は「JR四国の財政基盤を安定化する仕組みを

整えるよう、国に働きかける具体的な提言をする必要がある」と、国に対しJR四国の経営支援策を示すことを求めた。正司座長は「中間報告は修正していく」と応じた。

会合後、半井社長は「中間報告に国の支援を盛り込めるかどうか、調整していく」と話し、年度内にもう一度懇談会を開き、修正した報告案を提出する考えを示した。

(添田樹紀)

生歌披露し子育て応援

徳島に由紀さおりさん・安田祥子さん

徳島市のイオンモール徳島で8日、子育て支援事業「イオン すくすくラボ」があり、歌手の由紀さおりと安田祥子さんが「ちいさい秋みつけた」などを披露した。

由紀さんは「子育ての大変な時期は30、40年も続かない。実のある時間にして乗り切って」。安田さんは「日本の歌には短い歌詞とメロディーに優しい思いが込められている。お家で歌って頂きたい」と話した。

徳島市の三村愛奈ちゃん(11カ月)の父誠士さん(33)は「生の歌声の大切さが身にしみた」と話した。

子育てアドバイザーでは、筑波大医学医療系の徳田克己教授が、善悪の区別が分かる子どもを育てるためには悪いことは叱る▽スマホを見せる親とのやりとりが減り言葉の学びが遅くなる――などを話した。

(佐藤祐生)

障害者の作業所 記録映画で学ぶ

公開講座に60人

とくしま社会運動資料センターの公開講座が8日、徳島市の「ヒューマンわくびあ徳島」であり、市民ら約60人が、障害者たちが自ら考えて建てた共同作業所(愛知県知多市)のドキュメンタリーを鑑賞した。

記録映画監督の故・柳澤寿男さんが手がけた「そっちゃんやない、こっちゃん コミ ユニティケアへの道」(1982年)。障害者とその保護者らが一体となって作業所を作り上げる2年間の記録だ。当時、指導員として携わった徳島市のNPO法人「太陽と緑の会」代表理事の杉浦良さん(64)は「学校に通えず、施設にも入れないメンバーたちが、制度が整っていないくても地域の中でたくましく生きていく姿を見てほしい」と語った。写真。参加者の一人は「労働とは生きることであり、楽しみ。障害者にとっても働くことは重要だと思った」と話した。

(松尾俊一)

ながらスマホ 桂七福の 嘯のツボ

苦言を呈するつもりはあまりないのですが、ちよっと気になったもので……。土曜日のお昼に入ったラーメン屋さんのことで。私の前に座った母親。娘さんは小1くらいで、お母さんは30歳前後かな。ラメン1杯と白ご飯を1杯注文し、娘さんの分を別の器に取り分けて食べ始めました。

で、お母さんが娘さんに「こぼさんように気を付けて、お行儀良く食べてね」と笑顔で言い、それに対して女の子も「うん」と元気にうなずきました。良い感じの様子です。私が気になったのはその後です。お母さん、左手にスマートフォンを持ち、ずっと机に左ひじをつき、ずっ

2018.09.09 朝日新聞

仙谷氏の足跡 後世に

とくしま社会運動資料センター(徳島市昭和町3)は、10月に死去した元官房長官の仙谷由人氏が所有していた資料の整理を進めている。生前、仙谷氏が「私の人生を今後の社会運動に役立ててほしい」と、弁護士、政治家として活動した約40年間分の書類などをセンター関係者に託していた。センターでは仙谷氏の足跡をたどる企画展の開催を検討している。

社会運動資料センター

資料は、1971年籍、DVDなどで、段に弁護士活動を始めてボール100箱以上から2012年12月の上る。仙谷氏が議員会衆院選で落選するまで館を引き上げた際に、の間、仙谷氏が東京の主な資料を徳島県内の衆院議員会館などで自宅や個人事務所など管していた書類や書数力所に移していた。

40年分資料 生前に受託 企画展開催目指す



仙谷氏から譲り受けた資料を整理するセンター関係者―徳島市昭和町3

センター関係者が今年11月下旬から資料を整理作業を始めた。順次、センターに移した後、党内で立ち上り、長年にわたり労働争議などで連携してきた「ニューエープ」や96年の民主党(71)らに資料の活用を2)。 (新居和人)

センター関係者が今年11月下旬から資料を整理作業を始めた。順次、センターに移した後、党内で立ち上り、長年にわたり労働争議などで連携してきた「ニューエープ」や96年の民主党(71)らに資料の活用を2)。 (新居和人)

結党時の内部書類、国会で質問した際の議事録、国内外の要人と会談した写真、面会記録などが出てきている。センターでは企画展開催を見据え、仙谷氏に関する資料の提供を呼び掛けている。問い合わせは事務局(電088(602)053)

結党時の内部書類、国会で質問した際の議事録、国内外の要人と会談した写真、面会記録などが出てきている。センターでは企画展開催を見据え、仙谷氏に関する資料の提供を呼び掛けている。問い合わせは事務局(電088(602)053)

鳴教大セクハラ判決20年

元院生活動振り返る

徳島市で
公開講座

鳴門教育大セクハラのヒューマンわーくぴ訴訟の判決確定から今年で20年になるのを機に、訴訟の経過や支援活動を振り返る公開講座（とくしま社会運動資料センター主催）が12日、徳島市昭和町3

支えとなった」と語った。

約100人が来場。「セクハラ鳴教大元女性院生を支援する会」の代表だった元参院議員の乾晴美さんがコーディネーターを務めたパネル討論で、元大学院生は「裁判をしている間は泣いたり、裁判をやめたいと思ったり

と何度もくじけそうになった」と当時を振り返った。その上で「裁判は私一人ではできなかった。支援者がいてくれたことが精神的支えになった」と、改め

て感謝を述べた。「セクハラ問題を考える」鳴門教育大教授セクハラ事件を中心として」と題した大西聡弁護士の基調講演もあった。（萬木竜一郎）

全国社会短信

■「神戸の壁」に十字の祈り 阪神大震災から24年となるのを前に、猛火に耐えて焼け残った防

が、シャープのパソコン事業子会社「ダイナブック」（東京）の非常勤取締役になったことが12日、分かった。昨年12月1日付。ダイナブックの旧社

2021. 2. 25(木)

部落差別の歴史本に

社会運動資料センター

とくしま社会運動資料センター（徳島市）が県内の部落差別の歴史をまとめた「部落史関連講座講演録」（A5判、441頁、写真）を出版した。県立博物館の長谷川賢一副館長（歴史）ら5人の講演録や、豊富な資料に基づく被差別部落史の年表を掲載している。

2019年に3回開いた公での研究の流れも紹介している開講座の内容を収録。長谷川

副館長は、被差別部落の歴史 差別は時代を超えて存在観がどう見直されてきたかをし、起源説だけでは被差別部考察した。近世の権力が身分 落史を理解できないとも強制社会をつくり、最底辺に置 調。政治が原因という単純なかれた人々が差別の対象にな 構図ではなく、「みんながつったとする政治起源説は、1くった差別」だということを970年代後半以降の歴史研 意識するのが重要だとしてい究が否定。同和教育や社会啓

発の教材も80年代後半から書 四国大の関口寛准教授（歴史社会学）は、徳島にゆかりき換わっていったとし、徳島

「先人の活動伝えたい」

のある歴史学者喜田貞吉や考古・人類学者鳥居龍蔵、社会運動家賀川豊彦の3人が取り組んだ近代の被差別部落史研究を紹介。いずれも多くの功績を残したものの、人種主義に基づくなど被差別部落の捉え方には負の側面もあった点を指摘している。

このほか、国際日本文化研究センター（京都）の吉村智博元客員准教授、とくしま社会運動資料センターの中野輝行研究員、芝原生活文化研究所（徳島市）の辻本一英代表の各講演録を収めた。

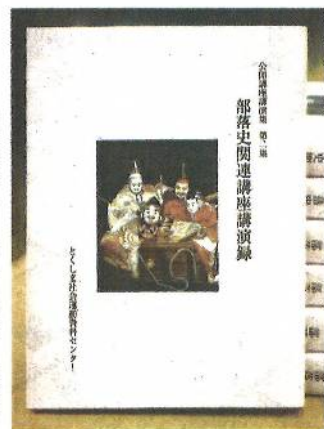
被差別部落史の年表は、593〜2010年に徳島や国内外であった被差別部落などに関する出来事を掲載。全国に先駆けた県同和教育研究会

講演録や年表を掲載

の結成（1950年）など、戦後の事案を数多く収録した珍しい年表となっている。部落解放同盟徳島県連などからセンターに寄せられた5千点の資料を活用し作成した。

センターの久積育郎代表委員は「差別をなくそうと取り組んできた先人の活動を後世に伝えたい。まだ知られていない取り組みもあるはず。手掛かりになる資料があれば提供してほしい」と話している。

頒布価格は1冊1800円。5冊以上の申し込みで1冊1500円。問い合わせはセンター（電088（602）0532）。（秋月悠）



財産にも大きな被害が及んだ。

三浦町長は「短時間に雨量が集中して急激に水位が上がったため、家財遺失を移動させる時間がなかった」と説明。生活再建に要する経費が町民の負担になっているとして、支援を要望した。2014年の台風

に続く被災者もいると報告

し「同じ場所で被害が出ている。抜本的な治水対策もお願いしたい」と求めた。

飯泉知事は「しっかりと被災者を支援し、河川整備や排水ポンプ車の配備にも対応していきたい」と述べた。(乾栄里子)

戦後の社会運動 紹介

徳島市の団体、講座講演録出版



とくしま社会運動資料センター(徳島市)は、徳島ラジオ商殺し事件の再審請求や吉野川第十堰の可動堰化計画を巡る住民投票など、県内で戦後に起きた主な社会運動を紹介する「社会運動史関連講座講演録」(A5判、117ページ、写真)を出版した。

センターが2019年に

開いた2回の公開講座の内容を収録した。ラジオ商殺し事件では、日本で初めて死後に再審無罪判決が出た際に支援団体が配ったチラシを掲載。労働組合や多くの著名人らが支援活動を展開したことを紹介した。

第十堰問題では、可動堰化を考えるために故姫野雅義さんらが1994年に発

刊した会報「吉野川だより」第1号を取り上げた。住民投票に至る経緯を振り返り、運動が官民による川づくり活動につながっている状況をつづった。

このほか、内部告発で被害を止めた大鵬薬品労組の取り組みや、阿南市蒲生田地区での原発建設反対運動、教員組合の活動の歴史などを説明。戦後の社会運動の詳細な年表も載せた。藤原学代表委員は「社会運動の歴史を記録するため、今後はいろいろな運動に関わった人の証言集も残していきたい」と話している。

1冊300円。問い合わせはセンター、電話088(602)0532。

(新居和人)

■徳島道一時通行止め 15日午前7時45分ごろ、板野町松谷の徳島自動車道上り線、中央分離帯のワイヤロープが破損しているのを西日本高速道路のパトロール車が発見した。復旧作業のため、藍住インターチェンジ(IC)15成ICの上り線が午前10時半から1時間通行止めになった。ロープには車両が衝突した跡があった。

(県警高速隊調べ)

【紙面編集】廣瀬睦季

労組の社会的責任学ぶ

徳島市 講座に関係者ら60人

県内で起きた労働運動を振り返る公開講座(とくしま社会運動資料センター主催)が13日、徳島市昭和町3のヒューマンわくくびあ徳島であった。大鵬薬品労働組合元執行委員長の北野静雄さん(74)が、研究者として自社製品の問題点を内部告発して薬害を防いだ経緯を紹介し「労働条件の改善だけでなく、製品の不正をたどるのが労組の社会的責任だ」と訴えた。

県内の労組関係者ら約60人が参加した。北野さんは、同社が抗炎症剤の発がん性などが疑われるデータを隠して国に申請し、製造販売



が承認されたことを問題視。「悪いデータを悪いと言えない職場環境を憂えな」といけな」と考え、1981年に労組を結成して告発した。販売は中止され

国が発がん性試験を義務化し、新薬の審査データを公開するようになった。

労組の結成で、組合員は昇進や昇給、配置転換など

で嫌がらせを受けたが、訴訟や県労働委員会への救済申し立てなどで不当労働行為が認められ、92年に会社

と和解。会社は労働条件だけでなく、製品や研究データでも労使で協議する場を設けた。

北野さんは、自身の告発以降も企業の製品データ改ざんが相次ぎ、不正発覚で製薬会社の多くが倒産したり他社に吸収されたりする

状況を指摘。「自社製品の安全性を知っているのは労働者と労組なので、製品の安全性、データの信頼性などをチェックするべきだ。そうすることで企業も守ることができ」と強調した。

(新居和人)

踊る阿呆 夏満喫

小松島港まつり始まる

小松島市の夏の風物詩「小松島港まつり」が13日、同市小松島町の本港地区で始まった。14日まで。

午後5時からサウンドハウスホールで開幕式典があり、地元の名長連や八千代連など市内外の9連が舞台踊りを披露。二条通、三条

通では12連が流し踊りを繰り広げた。来場者は一緒に踊ったり、カメラのシャッターを夢中で切ったりして「踊る阿呆に見る阿呆」を満喫していた。

日中は、海に向けたローラーの上をたらいに乗って滑る度胸試し「小松島港チ

キンレース」も開催。参加者や観客から歓声が上がっていた。

14日は午後8時から納涼花火大会が小松島新港岸壁周辺で開催され、2500発の打ち上げ花火が夜空を彩る。午前10時からは小松島みなと交流センターkocoo周辺などで「みなとコスプレフェスティバル」もあり、コスプレヤーが集まって海や港を背景に撮影を楽しむ。(佐藤陽香)

被差別部落の人たちが差別のない社会を目指して1922年に設立した「全国水平社」の下部組織として、2年後に当時の徳島市近郊の若者らが「徳島水平社」を立ち上げてから12月24日で100年を迎える。今もインターネット上などで差別的な書き

徳島水平社 設立100年

込みは後を絶たない。過去の歴史を振り返って人権問題に関心を持ってもらおうと、今月から県内で記念事業が相次いで催される。

22日から催し続々



井藤正一

(県立博物館提供)

中心人物・井藤の日記など紹介

徳島水平社が発足した当時、明治維新後の「解放令」で身分制度は廃止されていたが、衛生問題や、貧困による教育水準の格差などから被差別部落出身者への差別が根強く続いていた。いわれのない差別に立ち上がったのは、井藤正一（1902～60年）ら青年たち。徳島水平社を結成して県内の部落差別解消のために活動し、少なくとも35年まで存続したとされる。

ただ、その詳細は分かっていない。当時を知る貴重な資料とされるのが、中心人物の井藤が23

部落解放運動関心を

は部落解放同盟連合会が、奈良県の水平社博物館の駒井忠之館長を招き、アステイトくしまで委員の久積育郎さんは話している。

徳島水平社をテーマにし「歴史の大きなうねり」

中、人権問題を訴えた若者の姿は現代の私たちに教訓を与えてくれる」と話している。

(佐藤聡美)

40年の出来事を書いた日記（全12冊）。親族から日記を寄託された県立博物館は2020年からとくしま社会運動資料センターと連携し、文語体を現代語に置き換える翻刻作業に取り組む。22年には専門家らによる「井藤正一日記」翻刻委員会を設け、月1回、日記を読み解いている。

100周年記念事業では、井藤正一日記の紹介を中心にさまざまな催しを計画している。第1弾として県立博物館が今月22日から「創立100周年 徳島水平社」と題した展覧会を始める。日記などの関連資料を並べるほか、展示解説（27日、11月23日、12月14、22日）も行う。

とくしま社会運動資料センターは12月7日、県立図書館で井藤正一日記の内容を中心としたシンポジウムを開く。14日に



県立博物館に寄託されている井藤正一氏の日記（同館提供）

差別と闘う姿 明らかに

日記によると、井藤は徳島市近郊の農村部の被差別部落出身で、よく働く若者だった。徳島水平社を立ち上げる前年の1923年、20歳の井藤は思い悩み、東京での勉強や海外移住について考えていた。日記には具体的な差別の内容は書かれていない

もの、「身の不遇をいっせいに嘆ずるなり」との記述があり、置かれている環境について思索する姿も浮かぶ。

同年8月には周辺の被差別部落を回り、青年たちと水平社について話し合っている。24年1月には全国水平社に連絡し、11月には「非常によくよく運動熱は高まった」と書き、水平社設立の機運が高まっていることが分かる。

水平社立ち上げ後の25年の日記からは、12件の差別事件があったことがうかがえる。9月には列車に乗った学生が、田畑を耕す被差別部落の人たちに車窓から暴言を吐いたり、紙に石を包んで投げたりする「列車通学生差別事件」が起きた。井藤は差別をした人物らに対し、その誤りを糾弾するなど精力的に活動していた。

26年1月には「昨今、青年の意気は憤落して非常に成績が上らない」と記され、活動に対して悩みを抱えていたことが分かる。

(佐藤聡美)

徳島水平社創立100年
差別との闘い紹介
7日、徳島市でシンポ

とくしま社会運動資料センター（徳島市）は7日、シンポジウム「創立100周年徳島水平社をいま考える―青年活動家・井藤正一の日記をめぐって―」を同市の県立図書館で開く。

徳島水平社は24日に設立100年を迎える。設立の

中心人物だった井藤正一が残した日記の翻刻に携わったセンターの板東紀彦研究員が「『井藤正一日記』から見た徳島水平社」と題して報告。20代の若者だった井藤が、悩みながらも差別に立ち向かった姿を紹介する。

摂南大の佐藤正志名誉教授も「井藤正一の想いと行動」とのテーマで報告。同志社大の関口寛教授は部落史研究の現状などについて

語る。

センターの運営協議会委員の久積育郎さんは「100年前の青年が差別撤廃に向けて声を上げ、どう立ち向かっていったのかを知り、現存する差別問題を考えて人間の尊厳の大切さを感じてほしい」と話す。

午後1時から。参加無料。定員40人。問い合わせはセンター、電話088（602）0532。

（佐藤聡美）

徳島新聞 2024. 12. 2

徳島新聞 2024年(令和6年)12月3日 火曜日

徳島水平社設立100年
中心人物の日記読み解く
徳島市で記念学習会

被差別部落の差別解消をの板東紀彦さん(77)が、設立の中心人物だった井藤正一(1902〜60年)につが2日、徳島市内の教育集会所で語り、25人が耳を傾けた。

板東さんは、井藤が残した日記の文章を文語体から現代語に置き換える翻刻作業に取り組んでいる。日記によると1923年6月2日、井藤は地元小学校で催された雄弁会で、日本政府が部落差別を放置したまま、19年のパリ講和会議で人種平等案を提出したことを批判している。これについて、板東さんは「米國ではこの頃、日本人移民の排斥運動が高まっていた。人種平等案はそれを踏まえての動きだが、井藤は矛盾を感じていた」と説明した。

24年5月26日の日記には、井藤が自らを叱咤激励する記述があり、「部落解放の実現のために、落ち込むたびに自分を奮い立たせていた様子が分かる」と語った。

徳島水平社は24年12月24日に設立。節目に合わせ、県内で記念事業が相次いでいる。

（藤長英之）



徳島水平社設立の中心人物だった井藤正一について語る板東さん＝徳島市内の教育集会所

徳島新聞 2024. 12. 3

徳島水平社100年

差別と闘う

井藤正一日記から

①



井藤正一

その石つづては悪意の塊 半世紀以上が過ぎていた。だつた。1925年9月、徳島市近郊(当時)の田畑で働く人たちに、近くを走る列車の車窓から石が投げられた。石は、差別的な言葉が書き殴られた紙でくるまれていた。

田畑にいたのは被差別部落のお年寄りら。貧しい暮らしを支えるため、農作業をする子どももいた。通学中の学生らが乗る列車からは、あざ笑う声が聞こえてきた。

卑劣な投石行為は1日では終わらず、何日も繰り返されたという。明治維新後の1871年に身分制度の廃止を命じる「解放令」が出されてから

引き起こしたのだでしょう」と言う。投石事件のあらましは一冊の日記に残されている。記したのは市近郊の被差別部落で生まれた井藤正一(1902〜60年)。今からちょうど100年前の12月24日、部落差別解消を目指す宮本小三郎(04年没年不詳)ら若者たちが

当時、明治政府の経済政策や産業革命の余波で、被差別部落を含む村々は困窮し、衛生面も悪化した。子どもは家の手伝いなどで修学機会を失い、人々の暮らしに大きな格差が生まれ

た。松永さんは「こうした社会的背景が新たな差別意識につながり、投石行為をと、その後、学校などに抗議をしたが、協議が難航し

告。全国水平社中央委員の栗須七郎(1882〜1950年)らが派遣され、徳島毎日新聞(徳島新聞の前身)の後援を得て、県内各地の学校などで差別撤廃のための演説会を展開した。

事件の結末は日記ではなく、「大阪水平新聞」(25年11月15日付)に記されている。井藤や栗須らは県庁の学務課へも抗議。最終的に差別を行った生徒の父母は謝罪し、生徒が通う学校の校長は辞任した。

大阪水平新聞で「学生の差別問題」として報じられたこの事件は、県内で暮らす被差別部落の若者たちの差別にあらがう強い意志が明確に示された出来事でもあった。(佐藤聡美)

悪意の投石 犯人の学生特定 糾弾

県内の学生による差別事件を報じた大阪水平新聞(とくしま社会運動資料センター提供、画像の一部を加工しています)

徳島事件

学生差別問題

下獄中の近藤君

近藤君は、徳島市近郊の被差別部落に生まれて、現在、大阪府の刑務所に収容されている。彼は、1925年9月に、徳島市近郊の田畑で働く人たちに、近くを走る列車の車窓から石が投げられた。石は、差別的な言葉が書き殴られた紙でくるまれていた。

田畑にいたのは被差別部落のお年寄りら。貧しい暮らしを支えるため、農作業をする子どももいた。通学中の学生らが乗る列車からは、あざ笑う声が聞こえてきた。

卑劣な投石行為は1日では終わらず、何日も繰り返されたという。明治維新後の1871年に身分制度の廃止を命じる「解放令」が出されてから

引き起こしたのだでしょう」と言う。投石事件のあらましは一冊の日記に残されている。記したのは市近郊の被差別部落で生まれた井藤正一(1902〜60年)。今からちょうど100年前の12月24日、部落差別解消を目指す宮本小三郎(04年没年不詳)ら若者たちが

当時、明治政府の経済政策や産業革命の余波で、被差別部落を含む村々は困窮し、衛生面も悪化した。子どもは家の手伝いなどで修学機会を失い、人々の暮らしに大きな格差が生まれ

た。松永さんは「こうした社会的背景が新たな差別意識につながり、投石行為をと、その後、学校などに抗議をしたが、協議が難航し

告。全国水平社中央委員の栗須七郎(1882〜1950年)らが派遣され、徳島毎日新聞(徳島新聞の前身)の後援を得て、県内各地の学校などで差別撤廃のための演説会を展開した。

事件の結末は日記ではなく、「大阪水平新聞」(25年11月15日付)に記されている。井藤や栗須らは県庁の学務課へも抗議。最終的に差別を行った生徒の父母は謝罪し、生徒が通う学校の校長は辞任した。

井藤正一日記は徳島水平社創立前後の1923〜40年の日々が出来事書かれている。現在、県立博物館ととくしま社会運動資料センターが、文語体を現代語に置き換える翻刻作業に取り組む。井藤の記述を基に、本人の人物像や、創立100年を迎えた徳島水平社の歴史を紹介する。

徳島水平社100年

差別と闘う

②

井藤正一日記から

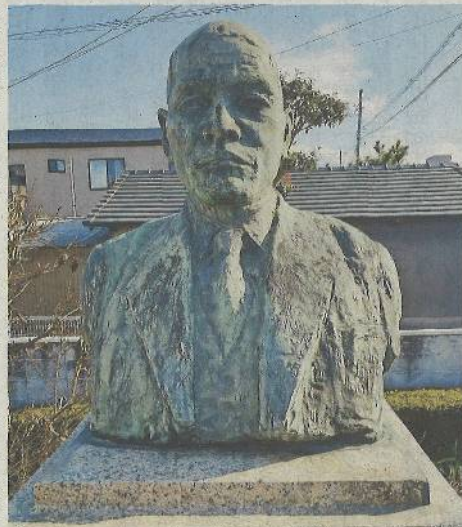
ちょうど100年前、部
わらで包むもの」の集荷作
落差別解消を目指して若者
業も手伝う。現在の県庁近
たちと「徳島水平社」を創
くの港まで約7キロを重い荷
立した井藤正一（1902
車を押して運び、1日2往
60年）。差別と闘う姿に
復することもあったとい
不屈との印象も受けるが、
う。

彼が残した「井藤正一日記」
から読み取れる人物像はそ
れだけでない。被差別部落
に生まれた身の上を嘆く言
葉も多くあり、差別に苦し
む姿が浮かび上がる。

生まれたのは、徳島市郊
外（当時）の被差別部落の
農村だった。20歳の頃に書
き始めた日記によると、井
藤の一日は朝早くから農作
業に精を出すことで始ま
る。その傍らで、家業の瓶
づと（瓶が割れないように
から早稲田大文学部の通信

井藤は学ぶことを大切に
し、夜には公会堂で
地域の子どもを対象に自習
会を開くなど、教育にも力
を注ぎ、自身は24年ころ
から早稲田大文学部の通信

井藤正一の功績をたたえ、徳島市内に建てられた胸像



た気がして怒りが込み上が
ってきたと、日記に書いて
いる。

日記は「我も一個の男子、
何を彼らに後れし可ならん
や。吾か前途よく見よ」と
続く。差別的な扱いを受け
ながらも、自ら奮い立た
せる姿がみ取れる。

差別に打ちひしがれる時
もあった。「何故に身はか
かる不遇の地区及び身に生
まれたるか」「我身の不遇
を嘆する事しきりなし」。

教育を受けている。
日記の明し文字の解説作
ではない。あくまで日常の
一部に活動があったよう
だ」と長谷川さんは言う。
日常の中の差別は井藤を
苦しめた。

24年5月、教員となつた
同窓生が、生徒を引き連れ
て見知らぬ顔で井藤の前を
通り過ぎていった。同級生
は洋服姿で自分は作業着
の創立だった。

（佐藤聡美）

勤勉な青年 自身の境遇に苦悩も

差別と闘う

③

井藤正一日記から

「人の世に熱あれ、人間がら、水平運動に希望を見に光りあれ」。全ての人々に出していたといえるでしょうの平等と尊厳を高らかに言う。日記の解説に携わる言して「全国水平社」が創立された1922年3月以降、日本各地に部落差別解消を求める水平運動が広がった。

徳島水平社創立の中心人物だった井藤正一（02～60年）が残した日記では、23年8月に初めて水平運動という言葉が出てくる。徳島市近郊（当時）で暮らす井藤は青年団の仲間と近隣の被差別部落へ出向き、中学生や青年団長を相手に水平運動を説いたことが書かれている。

「井藤は全国水平社の創立に大きな影響を受け、青年団活動の仲間と協議しながら



徳島水平社創立前後の動きが記された「井藤正一日記」＝徳島市の県立博物館

けるとくしま社会運動資料センター研究員の板東紀彦さんは「公会堂の建設を望まなければいけないほど、厳然たる差別が残っていた。それに立ち向かう拠点として公会堂を望まざるを得なかったことが、悲しみとして文章にも表れている」と話す。

日記はさらに「我々ばかりの惨酷なる社会に対しては胸中の憤りを抑制することとは出来ない」と続き、不条理な社会に激しく憤る。その上で「子弟の教育に全力を傾倒して大人物を養成するが部落差別改善の近道であらう」と、教育の必要性を訴えている。

これらの記述は徳島水平社創立の前年、23年5月2日から始まる日記の冒頭に書かれている。差別解消への井藤の強い思いは、水平運動へと向かう出発点から揺るぎなかった。

（佐藤聡美）

創立前年

不条理な社会に憤り

徳島水平社100年

差別と闘う

井藤正一日記から

④

四国4県の水平社のうち、徳島水平社は最も遅く創立された。他県では1923年4月5日の高知を皮切りに、同月18日に愛媛、24年7月11日に香川で産声を上げた。

同年9月20日、高知、愛媛、香川3県の水平社が参加し、松山市で全四国水平社が創立された。創立大会の様子を報じた「水平新聞」(10月20日付)には、徳島

す徳島市近郊(当時)の被

路の土地の所有者と何度も

差別部落には来ていなかった。24年10月13日付の「井藤正一日記」には「我在所の八幡様を御願の渡御する様交渉依頼」とあり、井藤がそれを問題視していたことが分かる。

ところが、先方からの返答は「何十年もの間のしきたりの上、道が狭くて入れない」というものだ。25年2月には、近隣の被差別部落から有志2人が同様の問題で井藤に相談に訪れており、県内で野をもちながら地域の問題

を巡る差別への対応に当りていた。井藤は、こうした身近な差別問題の解決に尽力する。そんな井藤を中心に、24

年11月から徳島水平社創立

をめぐり、井藤は、こうした身近な差別問題の解決に尽力する。そんな井藤を中心に、24

年11月から徳島水平社創立

をめぐり、井藤は、こうした身近な差別問題の解決に尽力する。そんな井藤を中心に、24

地域の問題 広い視野で解決に尽力



井藤正一に関する勉強会で講師を務める板東さん。井藤について「幅広い視点を持っていた」と評する＝徳島市内

る。同月15日の日記には初社役員へ出席を依頼する電報も打ち、準備が整った。12月20日には全国水平

徳島水平社100年

差別と闘う

井藤正一日記から

⑤

真っ赤なイバラの冠をシンボルマークにした「荊冠」。

1922年3月の水（当時）の公会堂には、200人以上が詰めかけた。

その荊冠を祝福される時が来たとの思いを込め、部落解放運動の象徴となった。

24年12月24日、徳島水平社の創立大会でもこの旗が掲げられたようだ。「荊冠旗」は、決議文の「学校当局者に対する労働運動の了解を求め、民族的差別の不可なること」を勧告することなど、そんな見出しで大会の様子

徳島水平社創立100年を記念して県立博物館で開かれている展示会―徳島市八万町



いたとみられる。

県立博物館に寄託されている、井藤が残した日記は23、40年の12冊。県立博物館とくしま社会運動資料センターは連携して翻刻委員会を設け、2022年から日記の順し文字を解読する作業を進める。現在、3冊目の1927年4月分まで終わり、センター研究員が板東紀彦さんは「まだ全

体像を理解するまでには至っていないが、徳島の水平運動を解明する第一級の資料だ」と語る。

徳島水平社創立100年の節目に合わせ、県内ではさまざまな顕彰事業が展開された。県立博物館の展示会（来年1月19日まで）を

過去も今も 解消を願い続く運動

はじめ、研究者によるシンポジウムや勉強会、記念講演会などが相次いだ。今後、翻刻集の発刊も関係者と協議をしていくという。

創立から1世紀が過ぎた今も、差別事件は決して過去の話ではない。近年でもインターネット上に公開された被差別部落の地名リストが問題になったほか、デマや偏見に基づく悪質な投稿も依然としてある。

部落解放同盟徳島県連合会執行委員長の齒菜山加代さんは「100年前と同じように、私たちの差別解消に向けた闘いは続いている。いまだに教育格差や就労格差などは残り、一日も早く差別がなくなる日が来てほしい」と願う。差別にあらがった若者たちの足跡を振り返るとは、現代の差別と向き合う契機にもなる。

（藤長英之、佐藤聡美）

徳島水平社100年

差別と闘う

井藤正一日記から

⑥

1924年12月24日、徳島市近郊(当時)の青年が中心となって徳島水平社を創立してから100年を迎えた。中心人物である井藤正一(02/60年)の日記が現存しており、解読作業が進んでいる。徳島水平社設立の意義や井藤正一日記の重要性について、近現代史や被差別部落問題に詳しい同志社大の関口寛教授に話を聞いた。

「差別が日常的にあった。水平社ができて、侮辱的な言葉などを使うと、その人を糾弾し、みんなで批判するようになった。当時は被差別部落の人だけではなく、障害のある人や病気の

人に対して侮辱的な言葉を投げかけることも特別に悪いことだと認識されていなかった。そうした状況を委ねるきっかけになったのが大きい。

(聞き手・佐藤聡美)

「100年前の部落差別の状況はどのようなものだったのか。」

日常生活で面と向かった差別があった。被差別部落の人に侮蔑的な言葉を投げ

徳島水平社創立100年シンポジウムで井藤正一日記について語る関口教授(徳島市の県立図書館)



「研究」「日記」「名義」「記」の魅力
心社大 関口教授

同大・関口教授に聞く

抗議の声 歴史的転換点

はどれだけ勇気のいることかと思わざるを得ない。井藤は迷ったり悩んだりしながら、それでも自分を奮い立たせ、書籍を一生懸命読むなどして抗議の声を上げた。徳島にとって歴史的に非常に大きな転換点をつくった勇気ある行動だった。それを確認することにおいて、日記の意義は非常に大きい。ものすごく苦悩しながら声を上げたことがリアルに伝わる資料だ。

「100年たってもさまざまな差別が残っている。差別は時代とともに形を変える。今はインターネット上で被差別部落の場所を無断で掲載する「アウティング」の動画もある。表立っては差別は影を潜めつつあるが、形を変えながら陰湿な差別が残っている。」

井藤正一日記は私たちに何を教えてくれるのか。一歩踏み出す人の苦悩や苦悩、勇気、その大切さを教えてくれる。社会問題に対して声を上げるのは自分の不利益などをどうしても考えてしまう。職場でおかしいな、良くないなと思うようなことがあっても見過ごしてしまつとか。「これはいかん」と声を上げることは大切さを再認識させてくれる。

社会はいろんな問題が新たに生まれる。今までもあったことが、「これはだめではないか」と誰かが言い始めて問題になる。その問題をどう解決するか。一瞬ではなく、長い時間をかけて少しずつ変わっていくものだと思う。〃おわり